

「考え、議論する道徳」を実践するための教材活用の視点

—道徳的に正統化された人物の分析から—

佐々木 基裕・歌川 光一・鈴木 翔*

How to Put Figures into Practical Use on “Thinking and Discussing Moral Education”

Motohiro SASAKI, Koichi UTAGAWA and Sho SUZUKI

1 問題の所在

(1) 研究の背景

文部科学省は、2015年3月に道徳教育に係る学習指導要領の一部改正を行い、従来の「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」（「道徳科」）として新たに位置づけた。「道徳の時間」として特設されて以来、約60年間にわたる日本の道徳教育の大きな転換である。道徳科の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を（広い視野から）多面的・多角的に考え、自己（人間として）の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」（カッコ内は中学校）こととされた。

道徳科設置に至るまでには、以下の3つの提言、報告、答申が出されている。

- 「いじめ問題等への対応について（第一次提言）」（教育再生実行会議 2013）
- 「今後の道徳教育の改善・充実施策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～」（道徳教育の充実に関する懇談会 2013）
- 「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」（中央教育審議会 2014）

そのなかで、道徳教育の具体的な指導方法をめぐって指摘された課題として、教材としての人物の扱いが取り上げられている。例えば、「道徳の時間の指導方法に不安を抱える教師が多く、授業方法が、単に読み物の登場人物の心情を理解させるだけなどの型にはまったものになりがちである」ことや、また「現代の子供たちにとって現実味のある授業となっておらず、学年が上がるにつれて、道徳の時間に関する児童生徒の受け止めが良くない状況がある」ことが指摘されている（道徳教育の充実に関する懇談会 2013）。加えて、「歴史的経緯に影響され、いまだに道徳教育そのものを忌避しがちな風潮があることや、「読み物」から一定の価値観を読み取ろうとする一方的で形式的な指導も見られること、各教科等に比べて軽視されがちであること」（文部科学省初等中等教育局教育課程課 2015）も、道徳を教科化させるに至った課題認識の一つとして挙げられるだろう。そうした指摘を受け、改正学習指導要領では以下のような配慮が求められている。

* 秋田大学大学院理工学研究科

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

1 〔中略…引用者〕

2 〔中略…引用者〕

3 教材については、次の事項に留意するものとする。

(1) 児童の発達の段階や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の開発に努めること。特に、生命の尊厳、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、児童が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと。

ここで「教材」という言葉が用いられているが、道徳教育においてはこれまで、「教材」ではなく「資料」という表現が一般的に用いられてきた。荒木(2015)によれば、道徳教育の本来の目的は、児童生徒に「道徳的価値の自覚」を促していくものなので、その際に用いられる「資料」は、決して価値を教えこんでいくようなものではないという考え方、また道徳はこれまで教科ではなかったため、「教材」という用語の使用に対して抵抗があったことが理由として考えられる。しかし上記の通り、今後は現代的な課題を題材として活用し、教材化することが求められている。人物という観点から見た場合には、単に偉人や先人を素材とした心情理解を行うだけでなく、児童生徒にとって身近な人物を教材として活用する営みが必要不可欠になると考えられる。

(2) 研究の目的

本稿では、道徳用教材のなかでも、児童生徒にとって身近で、かつ現代性を持ち合わせていると考えられる存命の人物に焦点を当て、それを教材化するにあたっての視点を検討することを目的とする。

偉人や先人という教材は、主として「読み物資料」や「コラム」において取り上げられてきた。その活用方法や特徴については、実践例を含め一定の研究の蓄積が見られる(鈴木ほか2011;赤堀 2016など)。歌川・鈴木(2016)は『私たちの道徳』を資料として、登場人物の観点から教材としての特徴を把握し、その活用方法および留意点について検討しているが、既に他界している歴史人物に着目した研究である。教材として取り上げられ、道徳性がある人物をどのように活用すべきかが、これまでの研究の主たる関心であったといえる。しかし、上述した研究背景を踏まえれば、これからの道徳教育に求められる身近かつ現代的な教材として、存命の人物の分析は必要不可欠である。その際に、比較的新しい現代的な題材である以上、その人物に係る道徳性がどのようなものなのか、どのように道徳性が付与されているのかを検討することは重要だと考えられる。

そこで本稿では、『私たちの道徳』において取り上げられている存命の人物について、既に他界している人物との比較の観点からその特徴を検討する。その上で、存命の人物を職業を基に類型化し、教材として活用するにあたっての視点について考察する。『私たちの道徳』で取り上げられている以上、存命の人物であっても何らかの道徳性がある人物であることは間違いがない。つまり道徳的に正統化されていると考えられるが、その道徳性にはどのような特徴があるのだろうか¹。

(3) 研究の手法

研究に際しては、歌川・鈴木（2016）による手法を踏襲した。『私たちの道徳』に登場する人物をすべてピックアップし、登場する教材の学年（校種）、内容項目、人物の属性（生年、性別、国籍、生存状況、職業）、社会的注目度、歴史的重要度についてデータベースを作成した²。

本稿では、このデータベースを用いて、存命人物と他界している人物との比較を行い³、存命人物を職業を基に類型化し、その類型ごとに教材の活用方法に関する考察を行う。

2 存命人物の属性と内容項目の関連、類型

(1) 内容項目と属性

ここでは、『私たちの道徳』に登場する人物のうち存命の人物の特徴を、既に他界している人物との比較から概観する。

内容項目に関しては、鈴木・歌川（2016）を参考として、以下では表1のように内容項目を略記する。なお、〈自分〉、〈人〉、〈生命〉、〈社会〉のどれにも該当しない項目については、〈その他〉とした。

表1：内容項目の分類

	〈自分〉	〈人〉	〈生命〉	〈社会〉
小1・2	自分を見つめて	人とともに	いのちにふれて	みんなとともに
小3・4	自分を高めて	人と関わって	命を感じて	みんなと関わって
小5・6	自分をみがいて	人とつながって	命をいとおしんで	みんなとつながって
中	自分を見つめ伸ばして	人と支えあって	生命を輝かせて	社会に生きる一員として

表1の分類をもとに、存命人物と他界人物がどの内容項目で取り扱われているのかを比較したのが表2である。

表2：生存状況別にみる内容項目

存命/他界	単元					合計
	〈自分〉	〈人〉	〈生命〉	〈社会〉	〈その他〉	
存命	12 34.3%	7 20.0%	4 11.4%	9 25.7%	3 8.6%	35 100.0%
他界	41 29.9%	38 27.7%	21 15.3%	37 27.0%	0 0.0%	137 100.0%
合計	53 30.8%	45 26.2%	25 14.5%	46 26.7%	3 1.7%	172 100.0%

表2からわかるように、存命人物は他界人物と比較して、〈自分〉、〈その他〉の項目で扱われる場合が多いことがわかる。

次に、人物の属性について見てみよう。表3は、存命人物と他界人物の属性を比較したものである。

第一に、性別としては、存命人物は他界人物と比較して、女性の割合が高く、3割以上を占めている。

第二に、国籍としては、存命人物はすべて日本国籍となっている。他界人物においては約4割が外国籍であることを考えれば、傾向の違いは顕著である。

それでは、社会的影響度についてはどうだろうか。明治以前生誕者と外国籍者を除いて比較

表3：生存状況別にみる登場人物の属性 (性別、国籍)

存命/他界	性別			存命/他界	国籍		
	男性	女性	合計		日本国籍	外国籍	合計
存命	23 65.7%	12 34.3%	35 100.0%	存命	35 100.0%	0 0.0%	35 100.0%
他界	118 86.1%	19 13.9%	137 100.0%	他界	83 60.6%	54 39.4%	137 100.0%
合計	141 82.0%	31 18.0%	172 100.0%	合計	118 68.6%	54 31.4%	172 100.0%

してみると、存命人物では34人中2人、他界人物では84人中8人が、『私の履歴書』（日本経済新聞）に執筆していた。奇しくも割合は共に5.8%である。他界人物の方が執筆のチャンスは理論上は多かったと考えられるため、存命人物は相当の社会的影響度を有していると見て良いだろう。

以上の分析から、『私たちの道徳』に取り上げられている存命人物は、児童生徒にとって身近（〈自分〉の項目）な存在であり、社会的影響度が高く、かつ現代的な課題（女性割合の高さ）も反映している、日本国籍の人物であるという傾向が浮かび上がってきた。

(2) 類型

『私たちの道徳』で取り上げられている存命人物は、172人中35人と、人数の上ではそれほど多くはない。しかし、上記の通り、身近で現代的な性格を有していることを踏まえれば、教科化以降の道徳用教材において、これからますます取り上げられていく可能性は高いことが予想される。したがって以下では、その活用方法を検討するために、探索的に存命人物を類型化し、その特徴を明らかにしていきたい。

表4は、存命人物の一覧と、その職業を表したものである。職業にはかなりの多様性が見られるが、サッカー選手やプロ野球選手といった〈スポーツ選手〉系、茶道家や能楽師といった〈伝統芸能〉系、ヴァイオリニストや作曲家などの〈音楽〉系、医学博士や科学者などの〈学者〉系、タレントや作家などの〈メディア文化人〉系などが類型として考えられる。ただし、これらの類型は排他的なものではない。

以下では、〈スポーツ選手〉系、〈伝統芸能〉系、〈メディア文化人〉系に焦点を当て、その特徴についての分析を行っていく。

3 存命人物の類型ごとの分析

(1) 〈スポーツ選手〉系

『私たちの道徳』では、全学年をとおして、読み物教材や人物コラムの中に、実在するスポーツ選手がのべ7回登場する。本節では、『私たちの道徳』に登場する実在のスポーツ選手がどのように道徳的に正当化されているのかを把握するため、以下の2点に着目して考察を進めていく。1つめの着眼点は、「①『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の傾向」であり、2つめの着眼点は、「②『私たちの道徳』におけるスポーツ選手の扱い方」である。

① 『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の傾向

はじめに、1つめの着眼点である『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の傾向を見てい

表4：存命人物の職業一覧

氏名	職業
日野原重明	医師・医学博士
河合雅雄	霊長類学者、児童文学作家、理学博士
澤穂希	サッカー選手
高橋尚子	陸上競技選手
俵万智	歌人
千住真理子	ヴァイオリニスト
イチロー	プロ野球選手
滝川クリステル	タレント、フリーアナウンサー
風淋	歌のおねえさん、シンガー
梶賀千鶴子	ミュージカルの作・演出・振付を担当
ロンドンオリンピック男子400mメドレーリレーチーム	水泳選手
葉祥明	絵本作家
天野篤	順天堂大学医学部心臓血管外科教授(博士(医学))
郡司ななえ	作家、小説家
内村航平	体操競技選手
向井千秋	宇宙飛行士
イチロー	プロ野球選手
毛利衛	宇宙飛行士
千住明	作曲家・編曲家・音楽プロデューサー
千玄室	茶道裏千家前家元15代汎叟宗室
尾本恵一	人類学者
三枝成彰	作曲家
南波六太(架空の人物)	宇宙飛行士
松井秀喜	プロ野球選手
曽野綾子	作家
山中伸弥	医学者
若田光一	宇宙飛行士
振分精彦(元小結高見盛)	大相撲力士
大木聖子	地球科学者
西村雄一	サッカー審判員
鈴木邦男	政治活動家
鎌田實	医師、ピースポート水先案内人
坂本浩美	教育者、作曲家
野村萬斎	能楽師、俳優
一戸冬彦	小説家

こう、『私たちの道徳』に登場する6人(団体)の傾向をまとめたのが、表5である。なおイチローは小学校3・4年生、小学校5・6年生と2度登場している。

表5を見ると、競技はそれぞれ異なるが、『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手6人には共通して、オリンピックや世界選手権、ワールドカップ等で顕著な成果を挙げているという特徴があることがわかる。国内はもちろんのこと、世界という舞台の中で活躍できることが『私たちの道徳』に登場する人物の選定に関わっている可能性が読み取れる。

また『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手は、他の登場人物に比べて年齢がかなり若いことが特徴的である。登場する6人(団体)のスポーツ選手の平均年齢は、2016年9月時点で平均35.0歳であり、最年長の高橋尚子でも44歳、最年少の入江陵介に至っては26歳である。このことから、過去に偉業を成し遂げた歴史上の人物というよりは、むしろ児童・生徒にとっても、記憶に新しく、身近なスポーツ選手を積極的に登場させているように思われる。

そして、『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の最も顕著な特徴は、国民栄誉賞の受賞者の割合が非常に高いことである。表5に示したように、6人(団体)のスポーツ選手のうち、

表5：『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の傾向

登場するスポーツ選手		競技	年齢	現役／引退	国民栄誉賞
澤穂希		サッカー	38歳	引退	「2011FIFA女子ワールドカップ日本女子代表」として受賞
高橋尚子		陸上競技 (マラソン)	44歳	引退	受賞
ロンドンオリンピック 男子400m メドレーリレーチーム	入江陵介	競泳	26歳	現役	受賞していない
	北島康介		33歳	引退	
	松田丈志		32歳	引退	
	藤井拓郎		31歳	引退	
イチロー		野球	42歳	現役	2度打診されているが辞退
内村航平		体操競技	27歳	現役	受賞していない
松井秀喜		野球	42歳	引退	受賞

半数の3人(団体)は国民栄誉賞を受賞している。これまでに国民栄誉賞を受賞したスポーツ選手(団体含む)は、9名であり、そのうち2人が他界していることを踏まえれば、存命の国民栄誉賞受賞者7人中3人が『私たちの道徳』に登場していることになる。またイチローは、自身が現役で発展途上であるとの理由から国民栄誉賞受賞の打診を辞退していることが知られている。

② 『私たちの道徳』におけるスポーツ選手の扱い方

続いて、『私たちの道徳』におけるスポーツ選手の扱い方の考察を行う。ここでは、はじめに、登場するスポーツ選手がどのような内容項目の中で語られているのかを把握することを目的とする。分類の方法に関しては、歌川・鈴木(2016)を参考に4つの内容項目に分類した。実際の分類は、表1を参照されたい。

そして、『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の扱い方を示したのが表6である。表6より、取り扱う学年が小学校3・4年に集中していることが見て取れる。そして、先に分類した内容項目に着目すると、ロンドンオリンピック男子400mリレーを除いて、すべての人物が〈自分〉の中で取り扱われていることがわかる。

表6：『私たちの道徳』に登場するスポーツ選手の扱い方

登場するスポーツ選手		学年	内容項目	タイトル	種類
澤穂希		小3・4	〈自分〉	夢は見るものではなく、かなえるもの	人物のコラム
高橋尚子		小3・4	〈自分〉	うれしく思えた日から	読み物
ロンドンオリンピック 男子400m メドレーリレーチーム	入江陵介	小3・4	〈人〉	ささえ合い 助け合い 「合い」の力で 心と心をつなげよう	その他
	北島康介				
	松田丈志				
	藤井拓郎				
イチロー	1回目	小3・4	〈自分〉	きつとできる	読み物
	2回目	小5・6	〈自分〉	夢に向かって確かな一歩を	その他
内村航平		小5・6	〈自分〉	希望と勇気が夢に近づく力になる	名言・格言
松井秀喜		中学校	〈自分〉	僕は一歩ずつ階段を上がっていく タイプだと思います。	名言・格言

では、実際に彼らが〈自分〉の中でどのように扱われているのか、いくつか特徴をあぶりだしていこう。まず1つめの特徴としては、彼らが幼いころから明確な「夢」を持ち続けた人物として語られることであり、2つめの特徴は、その夢のために「努力」し続けた人物だとして

説明されることである。そして、最後の特徴としては、彼らが世界を舞台に活躍するスポーツ選手であり、第一線のライバルたちと死闘を繰り広げてきたにも関わらず、誰ひとりとして「ライバル」のような存在を語ることはなく、自分と戦い続けてきた人物だということが強調されて語られることである。

競技スポーツという勝ち負けで成功の可否が判断されやすい世界で生きる彼らだからこそ、敵と戦うことが重要なのではなく、自分と戦い成長していくことが重要だという主張が説得力を持って語られるとも考えられるだろう。

(2) 〈伝統芸能〉系

『私たちの道徳』で登場する、存命の伝統芸能家（2016年9月21日時点）として、千玄室（小学校5・6年生用）、野村萬斎（中学校用）の2名が挙げられる。

まず、千玄室は、小学校5・6年生用『私たちの道徳』の内容項目〈社会〉の「みんなとつながって—世界の人々とつながって」に、以下のように登場する。

一盃に平和へのいのりを

千玄室

みなさんは、二十一世紀後半に、果たして日本の姿はどうなっているだろうか、と想像したことがありますか。

何年かかろうと、日本のみなさんに強く願うことは、温かい人間関係が息づく社会（世の中）を作る努力をおしまないということです。

自分が少しでも人より優位に立ち、一番を目指すような社会ではなく、これからは一人一人の人間が「ONLY ONE」（かけがえのない自分）として、みんなの中で生かされる世の中こそが実現されなければならないと思います。

戦争が人間社会にもたらす計り知れない不幸を地上から永遠に除去するためにも、一盃に平和へのいのりを深くこめて、平和へのちかいを新たにすることが私の使命です。

私も自分の職業を通じ、一盃のお茶によって世界中の方々にも少しでも幸せになっていただけるよう努力しています。

（同上書：178）

同ページには「世界の人々と交流するためにどのようなことができると思いますか。」という問いかけと、「大正十二（一九二三）年、京都府生まれ。裏千家前家元・十五代。『一盃からピースフルネスを』の理念を提唱し、世界六十数か国を歴訪。茶道文化の浸透・発展と世界平和の実現に向けた活動を展開している。ユネスコ親善大使。」という千氏のプロフィールが続けて掲載されている。

本教材は、千玄室「一期一会の教え—平和への祈りを深める—」（『京の子ども 明日へのとびら』中学校編』京都府教育委員会、2007年）からの転載となっている。千氏は、「一盃からピースフルネスを」の理念の紹介の際には、自身の特攻隊としての経験に触れている（国際連合広報センターHP「日本・国連親善大使 千玄室大宗匠」2016年9月22日最終アクセス）が、『私たちの道徳』においては、千氏の戦争経験や茶道家としての活動の記述が薄いため、内容項目としてのねらいである「国際交流・国際親善」（指導資料：216）と茶道、平和の因果関係が読み取りづらくなっている。

次に、野村萬斎は、中学生用『私たちの道徳』の内容項目〈社会〉の「社会に生きる一員として一国を愛し、伝統の継承と文化の創造を」[「sayingこの人のひと言」]に下記のように登場する。

日本人に日本をもっと知ってもらいたいと思っています。
知らないことは、過度のうぬぼれや卑下を生みます。
世界を目指すには、
まず日本を、そして己れを知ることではないでしょうか。
野村萬斎
■のむら まんさい (1966～)
狂言師。『MANSAI◎解体新書』など。

(同上書：211)

このフレーズは、野村萬斎『MANSAI◎解体新書』(朝日新聞出版、2008年)からの引用である。同書は、野村氏が現代舞台劇場である世田谷パブリックシアターの芸術監督就任二期目に入ることを契機として、同氏の日本演劇のアイデンティティをめぐるエッセイと、2002年12月から2008年1月までの舞台の様子をまとめたものである。上記のフレーズは、伝統演劇(能、狂言、歌舞伎、文楽など)と現代演劇(新劇、アンガラ、小劇場)といった演技形態の潮流から、ジャンルを超えた「日本演劇のアイデンティティ」を再発見する際の「古典からの発想」の重要性を述べる文章の一部である。

どの分野でもそうですが、世界の中で日本のアイデンティティを持つとするならば、やっぱり「日本でしか出来ないことって何だろう？日本って何だろう？」ということ再度自らが真剣に考えるべきではないでしょうか。〔中略…引用者〕もちろん、日本人にとって不得手な、弱点となる技法もあることを認識し、しかし同時に日本人にしか出来ない手法があって、その方法論を確立することが、アイデンティティの強さにつながると思います。そういう意味ではひとつの手段として、もっと演じる側も観る側も古典、クラシックなものに自信を持たないといけないと思います。〔以下、上記フレーズ…引用者〕(同上書：13-14)

この文脈上では、先のフレーズは、演者、観客双方が伝統演劇の古典を学ぶ姿勢について述べているが、抜き出された結果、抽象的な「日本人のアイデンティティ」論として読み取れるものとなっている。

千玄室は茶道裏千家(前)家元として、野村萬斎は能楽狂言方と泉流野村万蔵家の名跡として、基本的には世襲によって芸を引き継ぐ活動を行っており、その過程で、「世界の中の日本の芸能」という視点を積極的に社会に提示している存在である。

一方、『私たちの道徳』において、出自や、専門とする芸能、世襲による芸の継承にまつわる側面には触れられず、イメージとして「国境や芸能のジャンルの壁を内破し、日本の芸能アピールしている人物」という扱いをしている点に特徴があると言える。

香月孝史によれば、門外漢によって卓越化された地位を与えられた歌舞伎役者の「格調高い」イメージは、芸術としての高尚さの根拠の具体的な検討を伴わないため、確固としたものになっているという(香月 2010)。千玄室は特攻隊としての経験を入口とした戦後の「平和」理念の

強調によって、野村萬斎は、芸能ジャンルを横断することによる結果としてのメディアミックス戦略（テレビ、映画、CM、舞台、書籍など）によって、伝統芸能に予備知識のない児童生徒にもイメージが持ちやすい人物と言える。『私たちの道徳』の使用に際しては、このイメージに拠って児童生徒の伝統芸能の「格調高さ」を与え、人物を正統化するのではなく、国語科（伝統的な言語文化）、社会科（第二次世界大戦）、「伝統・文化」教育とのクロスカリキュラム化といった教育課程上の工夫や、人物にまつわる視聴覚教材等の多様な教材との併用といった教育方法上の工夫によって、正統性の「根拠」を考え、議論させることが必要となるだろう。

（3）〈メディア文化人〉系

〈スポーツ選手〉、〈伝統芸能〉とは異なって、〈メディア文化人〉というのは正確には職業ではない。それにも関わらず、このような類型を検討する必要があるのは、存命の人物のなかには、その人の職業ないし専門性を離れた扱われ方をしている人物が少なくないからだ。

小学校3・4年生における〈人〉の項目には、タレント・フリーアナウンサーの滝川クリステルが登場している。「(1) だれに対しても真心をもって」の「日本文化の中にある礼ぎ」において、「おもてなし」を紹介するスペースがあり、そこには以下の文章とともに、滝川の写真が掲載されている。

2020年のオリンピック・パラリンピックを東京にまねくためのスピーチで、日本の「おもてなし」という言葉が話題になりました。

「おもてなし」は、人のことを考え、人を大切にするふるまいであり、礼ぎの一つです。

写真には、メディアでも話題になった「おもてなし」ポーズをする滝川クリステルの様子が写っている。しかし、滝川に関する説明らしきものは何もない。先述したとおり、滝川の職業はタレントであり、礼儀に関する専門性を有しているわけではない。オリンピックの招致スピーチは、対外的なイメージ戦略、文化的な外交という側面も有しており、滝川がその役に任ぜられたのも、決して礼儀に関する専門性を評価されてのことではない。

また、〈学者〉類型にも該当するが、〈メディア文化人〉としての性格を持つと考えられる人物もいる。中学校の〈社会〉には、医師の鎌田實が登場している。「(6) 家族の一員としての自覚を」において、コラム「誰かのために」という鎌田の文章が掲載されている。鎌田の経歴は、以下のように紹介されている。

東京都出身。医師。諏訪中央病院名誉院長。経営危機の状況にあった諏訪中央病院の医師として勤務、昭和63（1988）年に院長になる。

著書「がんばらない」では、延命だけを目的にした治療を批判的にとらえ、患者とその家族に接する豊富な経験や豊かな生と死についての考えがつつられている。

ベラルーシ共和国（当時ソ連）のチェルノブイリ原子力発電所事故の被爆患者の治療などの支援活動に取り組んでいる。

これが〈生命〉項目に掲載された文章であれば何の違和感もないが、繰り返しになるが〈社会〉の項目である。医師という専門性を背景としながらも、文筆家・文化人として社会的な影響力を発揮していることが、〈社会〉項目で取り上げられるにふさわしい道徳性を有している

ことの根拠として考えられる。しかし、テレビでのコメンテーター活動や、人生訓についての著書を通じて著名になった経緯などには触れられていない。「誰かのために」という文章も、出典は『到知』（到知出版社）という、各分野で一道を切り開いてきた人物の体験談を紹介することを目的とした雑誌に掲載されたものである。したがって、この文章の背景に直接的に医師としての専門性があるというよりは、文筆活動を通じてそれが社会関係資本へと転換したことを根拠としていると考えられる。

鎌田のコラムを活用した授業実践紹介においても、専門性から離れた紹介の仕方についてのフォローが必要であることが指摘されている。野本（2015：211）は、同コラムを利用した授業のポイントとして、『諏訪中央病院』のコンセプトや、『がんばらないチャリティーコンサート』など、鎌田實さん自身が動画をたくさんあげておられるので、導入や終末などで用いるのも資料のメッセージを理解するのに効果的である」ことを指摘している。

他にも、日野原重明（医師）が「たすけあって生きる」（小学校1・2年、〈人〉）として登場し、近年は作家というよりは保守系の評論家としての活動が目立つ曾野綾子が〈人〉におけるメッセージとして登場するなど、〈メディア文化人〉として本来の専門性から離れた紹介の仕方をされるケースは多い。社会的にはピエール・ブルデューが指摘したような資本の転換、履歴効果として説明できる現象である。しかしこれを授業実践として落とし込む場合には、野本（2015）が指摘するように、教える側が教科書以外の多様な教材を提示し、その道徳性の根拠について考えるような実践が求められるだろう。

4 今後の展望と課題

ここまで類型ごとの検討を加えてきた。〈スポーツ選手〉系における国民栄誉賞、〈伝統芸能〉系と〈メディア文化人〉系における専門性との関係など、個々の類型独自の特徴はあつつも、共通して指摘できることは、存命の人物を教材として扱う場合には、教科書・資料集として既にあるもの以外の教材を用いて、多面的・多角的な教材利用が求められるということである。

表4や類型を振り返れば、現代的で身近な「道徳的」人物は相当の多様性を有している。なかには著述を行わない人物も含まれるため、尚更それを紹介する側の配慮が求められる。しかしこのことを悲観的に捉える必要はない。身近かつ現代的であるからこそ、歴史人物とは比較にならないほど、利用可能な視聴覚資料は多いはずだ。新聞などの時事的な資料を授業に導入することも比較的容易だろう。多面的・多角的な教材利用と、存命の人物との相互作用を念頭に置いた授業づくりが推奨されている、と捉えるべきではないだろうか。

もちろん、このことは、他界している人物にも同様に留意すべきことではある。しかし存命の人物の場合、身近かつ現代的な素材であるが故に、その反面として、その人物の「道徳的」でない側面を児童生徒が情報として有している可能性がある。そうした側面を基とした心情の理解・読み取りに墮してしまえば、教科化の理念を達成することは難しくなるだろう。

本稿では注1に記したとおりに、『私たちの道徳』という教材に登場していることをもって、道徳的な「正統性」が付与されるという見方をとってきた。更に今後検討すべきこととしては、こうした教材における存命の人物の取り上げられ方・視点が、学校における教科の正式な教材において採用されたことによって正統化される、所謂「お墨付き」を与えられる可能性があることである。

上記のことは、授業実践において留意すべきポイントであると同時に、これからの道徳教育における教材研究において検討されるべき視点であると考えられる。これらについては、さら

なる分析が期待される。

【注】

- 1 本稿では、専門的知識の正統化に関する藤垣（2003）の議論を参考として、専門家集団によって認められた教科書という媒体に掲載されていることをもって、道徳的な「正統性」が付与される、という見方を取る。歴史的人物や偉人の場合よりも、存命の人物の場合、教科書に取り上げられることの効果は大きいと考えられる。
- 2 各項目の詳細については、歌川・鈴木(2016)を参照。ただし、2016年9月23日時点でのデータに更新している。
- 3 本調査は『私たちの道徳』に登場する人物を母集団とした全数調査である。また人物の属性は教科書の記述に則っているため、変数としてのランダム効果はない。そのため、以下の分析において統計的検定を行う必要はない。

【引用・参考文献】

- 赤堀博行, 2016, 「魅力的な読み物資料の特質と活用（第24回）読み物教材を効果的に活用するための基本的な考え方」『道徳と特別活動：心をはぐくむ』32（12）：28-31.
- 荒木寿友, 2015, 「道徳科の教材—資料が教材に変わってどうなるか？」『道徳教育』55（12）：16-17.
- 中央教育審議会, 2014, 「道徳に係る教育課程の改善等について（答申）」
URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2014/10/21/1352890_1.pdf（最終アクセス2016/09/23）.
- 道徳教育の充実に関する懇談会, 2013, 「今後の道徳教育の改善・充実方策について（報告）～新しい時代を、人としてより良く生きる力を育てるために～」
URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/houkoku/_icsFiles/afiedfile/2013/12/27/1343013_01.pdf（最終アクセス2016/09/23）.
- 藤垣裕子, 2003, 『専門知と公共性—科学技術社会論の構築へ向けて』東京大学出版会.
- 香月孝史, 2010, 「歌舞伎役者の『格調高さ』」南後由和・加島卓編『文化人とは何か？』東京書籍, 210-211.
- 教育再生実行会議, 2013, 「いじめ問題等への対応について（第一次提言）」
URL:http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai1_1.pdf（最終アクセス2016/09/23）.
- 文部科学省初等中等教育局教育課程課, 2015, 「『特別の教科 道徳』設置の経緯と概要」『初等教育資料』（931）：6-9.
- 野本玲子, 2015, 「誰かのために」荒木紀幸・松尾廣文・荊木聡・糊澤実編『考える道徳を創る「私たちの道徳」教材別ワークシート集』明治図書, 211-214.
- 鈴木由美子・永瀬美帆・藤橋智子・今永泰生・江玉 睦美・松田芳明・宮里智恵・椋木香子・森川敦子, 2011, 「道徳授業用の読み物教材に含まれる価値項目の分析」『学習開発学研究』（4）：57-65.
- 歌川光一・鈴木翔, 2016, 「登場人物にみる『私たちの道徳』の特徴—その活用方法および留意点を視野に入れて—」『名古屋女子大学紀要』, 62：185-194.

